Dockerで手に入れるデプロイ環境

2018-06-30 kamijin-fanta

https://kinoko-hoge.connpass.com/event/88048/

自己紹介

- @kamijin-fanta
- インフラな会社
- Scala, TypeScript

目標

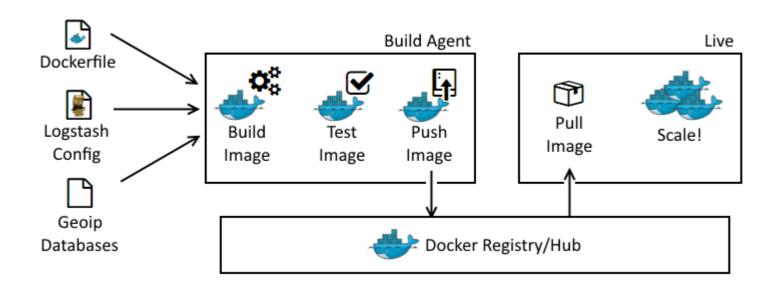
- 周辺技術の名前・関係性
- k8s構築方法を知る
- CIを回して、モダン・安全に本番アプリケーションをデプロイする

※注

- エディタをDockerの中に閉じ込めるとかマニアックな話じゃないです
- ざっくり理解するための資料なので、細部まで正確性を求めないでください

何故Dockerでデプロイ環境を作るか

- なぜDocker/k8s
 - 高可用性
 - インフラ・アプリケーションの分離→可搬性
- 何故Dockerで開発環境を作るか
 - 環境を統一させやすい
 - ミドルウェア・アプリケーション・ライブラリ / 開発・・ステージング・本番



コンテナとオーケストラレータ

Webアプリケーション デプロイ史

- apache/tomcatなどのサーバをセットアップ・ftp/rsyncでアップロード→個人端末のビルド環境に依存
- リモートサーバーにVCSで同期・手動でビルドさせてデプロイ→個人端末・開発/本番で バージョン管理難しい
 - ex: サーバ・言語バージョンのアップデートでコードが変わる場合...
- 仮想マシンのイメージをビルドして展開→リソースオーバーヘッドが大きい・オートスケールが間に合わない
- 初期PaaS(Google App Engine/初期のheroku)→言語バージョンなどがプラットフォームに 縛られる
- コンテナ→手元・開発・本番で各種バージョンを合わせるのが容易で、リソース消費が 比較的少ない

可用性を上げたい

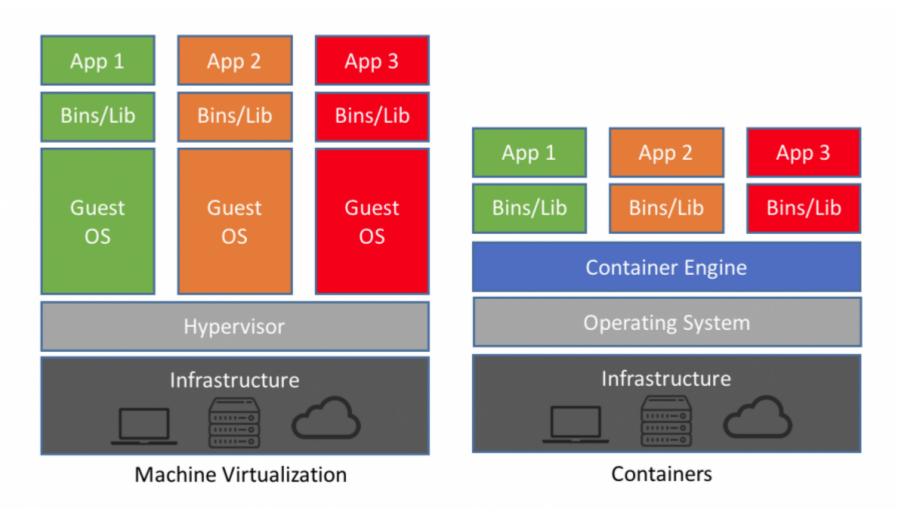
- 1台構成 → 落ちたらしんどい
- アクティブスタンバイ → 片方が完全に余剰リソースになる
- クラスタリング → 複数のマシンを束ねて一つのリソースとして見る・数台壊れた程度で サービスに影響が出ないように設計・リソース効率改善

ソリューション

- コンテナ
 - アプリケーションをイメージにまとめる
 - 仮想マシンより軽量
 - どこでも同じように動かす事ができるようにする
 - 手元/dev/stage/prodでの環境統一ができる
 - デプロイ改善 (属人性排除)
- コンテナオーケストラレーション
 - コンテナをいい感じに指定した数どこかで起動してくれる
 - 必要なメモリ容量・ディスク容量などを指定して空いているノードを割り当ててくれる
 - 落ちたら別のところで再起動
 - 可用性向上
 - リソース効率改善

コンテナ技術

- Ixd
 - 対応する技術はKVM
 - 複数のアプリケーションをまとめてイメージに焼く
 - 標準的な構成をコンテナ化して、環境のコピーなどを用意にする
 - [Java, Redis, MySQL]
- Docker
 - 1つのコンテナに1つのアプリケーションを配置する
 - サンドボックス
 - 複数コンテナを組み合わせる
 - [Java] [Redis] [MySQL]



https://blog.netapp.com/blogs/containers-vs-vms/

オーケストラレーション技術

- DC/OS (mesos/marathon/metronome)
 - MesosでSpark/Cassandraなどを使っていると、リソースの共有が可
 - 定期的なジョブ実行(Cron)
 - コンテナを指定した数どこかで実行する
- kuberenetes (略: k8s)
 - yamlでインフラを記述
 - コミュニティ標準になりつつ有る
 - 複数のアプリケーションを サービス 単位でデプロイ
- swarm
 - Docker標準/今後k8s互換に?
 - DockerCompose

コンテナオーケストラレーションの細かい動作

- クラスタリング
- ネットワーキング
 - VXLAN/UDP/ipip/bgp
 - gcp/aws
- 監視
 - HTTPポート監視・コマンド実行
 - コンテナ再起動
- ログ管理
- ローリングアップグレード

チュートリアル

- 実際に、どのように開発環境・本番環境を作っていくかを見る
 - ローカルでのテスト・ビルド
 - CIでのテスト・ビルド
 - クラスタでCI・デプロイ

ローカルでのdocker build

• 1つのDockerImageを配布する単純な例

https://github.com/kamijin-fanta/docker-example-2018

- Reactのプロジェクト
 - nodeのバージョンは9で動かしたい
 - 依存ライブラリは yarn コマンドで取得
 - テストは CI=true yarn test --ci で実行
 - ビルドは yarn build で build ディレクトリに生成
- サーバはNginxを使いたい

Dockerfile

```
FROM node: 9.11 AS build
WORKDIR /app
COPY package.json yarn.lock ./
RUN yarn
COPY . ./
RUN CI=true yarn test --ci
RUN yarn build
FROM nginx:1.15 AS web
COPY --from=build /app/build /usr/share/nginx/html
```

```
docker build -t docker-example-2018:0.0.1 . docker run --name docker-example-2018 -d -p 8080:80 docker-example-2018:0.0.1
```

雑に1台のマシンにデプロイ

[Unit]

Description=docker-example-2018
Requires=docker.service

[Service]

Type=simple

ExecStart=/usr/bin/docker run --name docker-example-2018 -p 8080:80 docker-example-2018: Restart=always

[Install]

WantedBy=multi-user.target

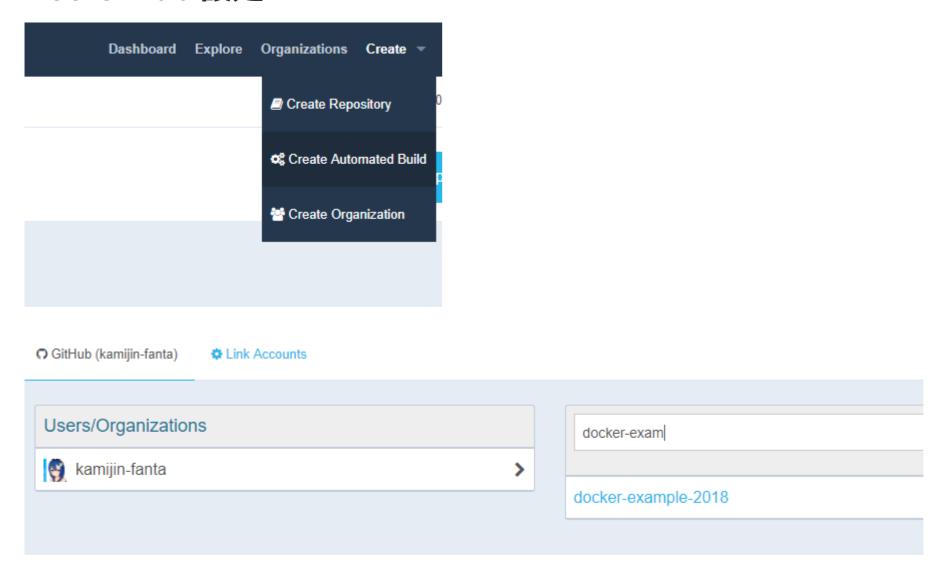
- ↑を /etc/systemd/system/docker-example-2018.service みたいな位置に設置する
- systemctl enable docker-example-2018.service
- systemctl start docker-example-2018.service

スケールさせる必要がない・個人開発ならこのくらいでも良い

CIを設定する

- さっきのGithubに置いたReactプロジェクトをDocker HubでCIする
- 公開リポジトリ・レジストリなら無料で出来る→OSS向け
- Webhookを設定すればPush時に自動的にビルドしてくれる

Docker hub 設定

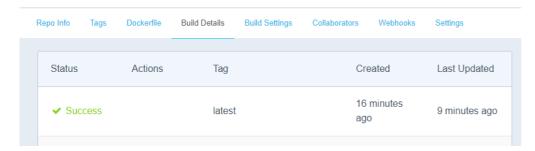


リポジトリ選べる

PUBLIC | AUTOMATED BUILD

kamijin/docker-example-2018 ☆

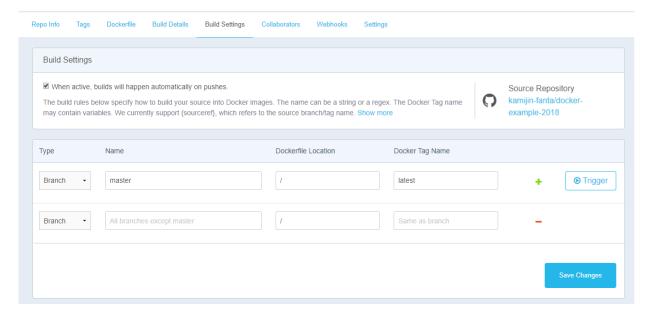
Last pushed: 9 minutes ago



PUBLIC | AUTOMATED BUILD

kamijin/docker-example-2018 ☆

Last pushed: neve



https://hub.docker.com/r/kamijin/docker-example-2018/

(割と時間掛かる...)

Google Container Builder

- 機能的にはDocker Hub+αという感じ
 - 基本非公開のレジストリにPushできる
- ビルド時間課金+ストレージ使用量の課金
 - プライベートなプロジェクトを多数ビルドするならこっちが良いかもしれない
- 割と早い

DockerHubとやることはあまり変わらないので、省略

https://cloud.google.com/container-builder/docs/creating-build-triggers?hl=ja

クラスタでCI・デプロイ

- コンテナのビルド・ビルド後のデプロイ先にDocker/k8sを使用
- k8sは検証目的なのでminikube(後述)で建てる
- k8sの上でjenkinsのCI環境を整える
- CIが完了すれば、自動的にアプリケーションがデプロイされるようにする
- 開発環境・本番環境を分離する

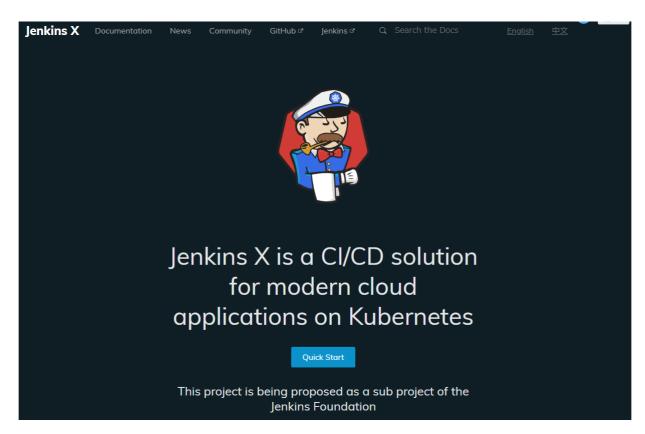
ci: 継続的インテグレーション (continuous integration)

様々なkubernetes利用形態

- 利用方法
 - マネージド
 - GCP GCE
 - AWS EKS
 - オンプレ
 - GCP, AWS, Azure
 - その他laaS・ベアメタル
- 構築ツール
 - o tectonic, rancher, **minikube**, etc...

jenkins-x

- Github/k8s環境に適したCIパッケージ
- ローカルのマシンからCLIで各種操作行える
- デプロイ構成をGithubのPRで管理する
 - どのアプリ・バージョンがデプロイされているか
- 今回はjenkins-xとデプロイ先を同じk8sに配置



Linuxマシンを用意

- GCPでも仮想マシンでもなんでもいいです
- 例では、さくらのクラウドに4G/4コア/ubuntu16を構築
- RAMをケチるとクラスタが崩壊するので注意

minikube

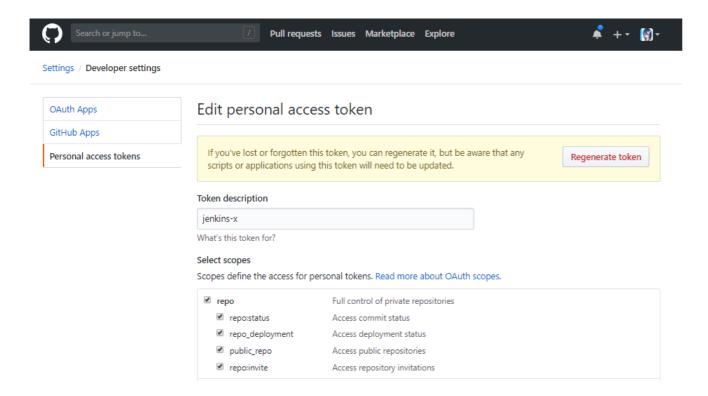
- 基本的にはDockerのインストールと、 minikube コマンドの導入のみ
- Docker hubではなく、独自のDockerRegistryを建てるので、その設定を行う

```
# configure insecure-registry
echo '{ "insecure-registries":["10.0.0.0/8"] }' > /etc/docker/daemon.json
service docker restart

# start minikube
minikube start
```

- https://github.com/kubernetes/minikube の Linux Continuous Integration without VM Support を参考にしてください
- Docker導入: https://docs.docker.com/install/linux/docker-ce/ubuntu/

Github設定



- GithubでPersonal Access Tokenを作成
- jxのインストールに複数回必要になるので控えておく
- 必要な権限は repo, user:email

jx install

- jxコマンドをダウンロード・ jx install でウィザードが開始
- GithubのKeyを作成: repo, user:email

```
# jx
curl -L https://github.com/jenkins-x/jx/releases/download/v1.2.140/jx-linux-amd64.tar.gz
sudo mv jx /usr/local/bin
# helm
curl -L https://storage.googleapis.com/kubernetes-helm/helm-v2.9.1-linux-amd64.tar.gz |
sudo mv linux-amd64/helm /usr/local/bin/
# dependency
apt install make socat
# install
jx install
```

詳細: https://jenkins-x.io/getting-started/install-on-cluster/

jx トラブルシューティング

- 一発でインストールできないと、色々ゴミが残ってしんどい
- インストールし直す前に以下のコマンドを打ってクリーンアップしてからやり直すこと をオススメ

```
# k8sクラスタ上のjxのデプロイ・設定などを削除
kubectl delete ns jx
# 手元マシンに残っているjxへの接続情報・Githubの認証情報などを削除
rm -rf .jx
# k8sクラスタ上のhelmの削除
kubectl -n "kube-system" delete deployment tiller-deploy`
```

jxインストール完了

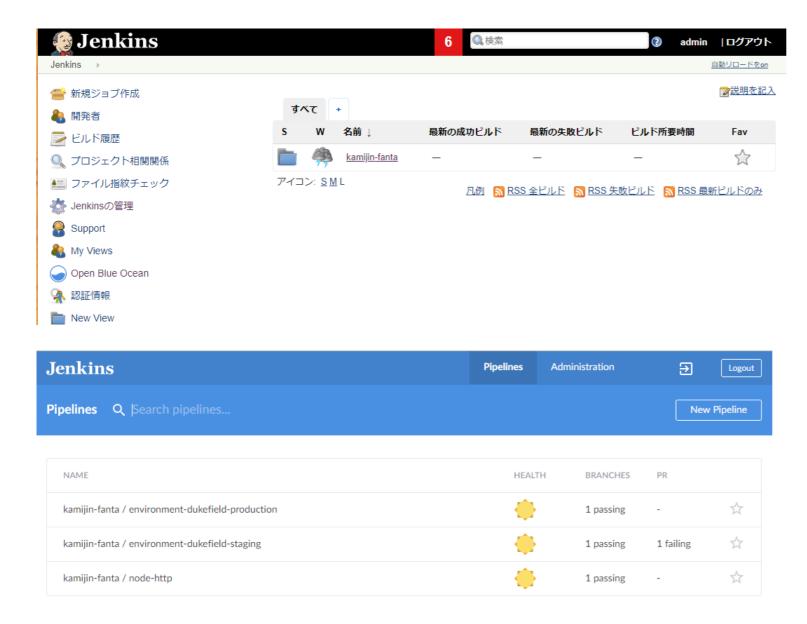
コンソールに認証情報などが表示されるので控える

```
Jenkins X deployments ready in namespace jx
       ************************
           NOTE: Your admin password is: ******
       ***********************************
       Getting Jenkins API Token
unable to automatically find API token with chromedp using URL http://jenkins.jx.153.127
Please go to http://jenkins.jx.153.127.201.69.nip.io/me/configure and click Show API Tok
Then COPY the token and enter in into the form below:
```

勝手にできたエンドポイント・UI

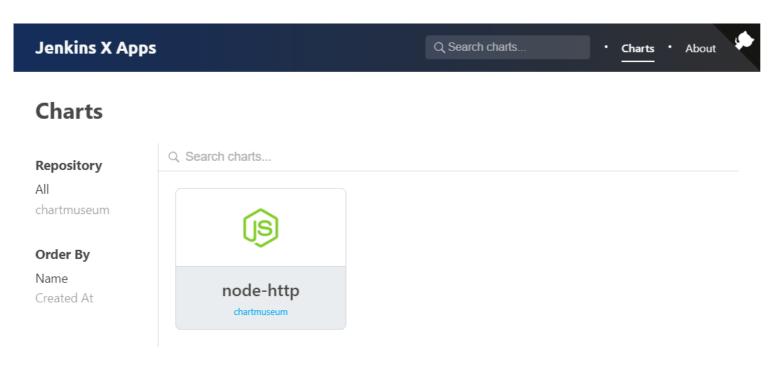
- 様々なUIやAPIが追加された
- URLを確認するには jx open

Jenkins



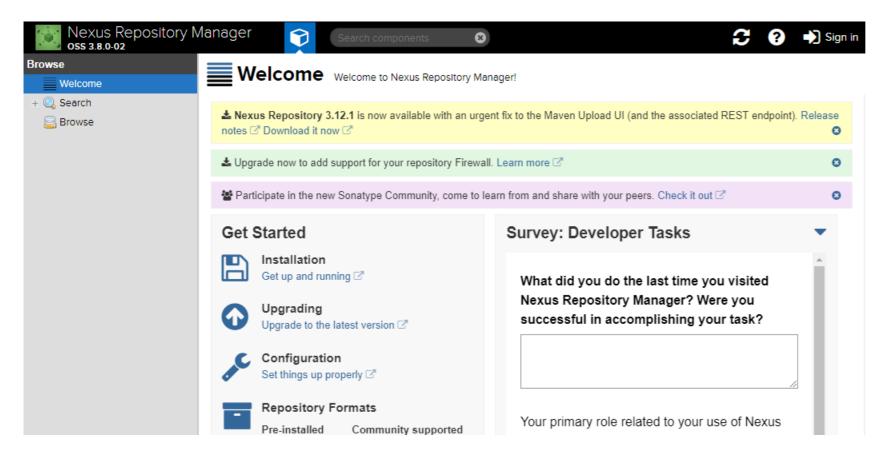
Monocular

- アプリケーションのカタログみたいなもの
- これからプロジェクトを作っていくが、ここに登録される
- 利用可能なアプリケーション・バージョンなどが見渡せる



Nexus

- Javaのアプリケーションのリポジトリ
- 今回は使わない



Githubにリポジトリが勝手にできる

• staging/productionのデプロイ設定が記述されている

environment-dukefield-production

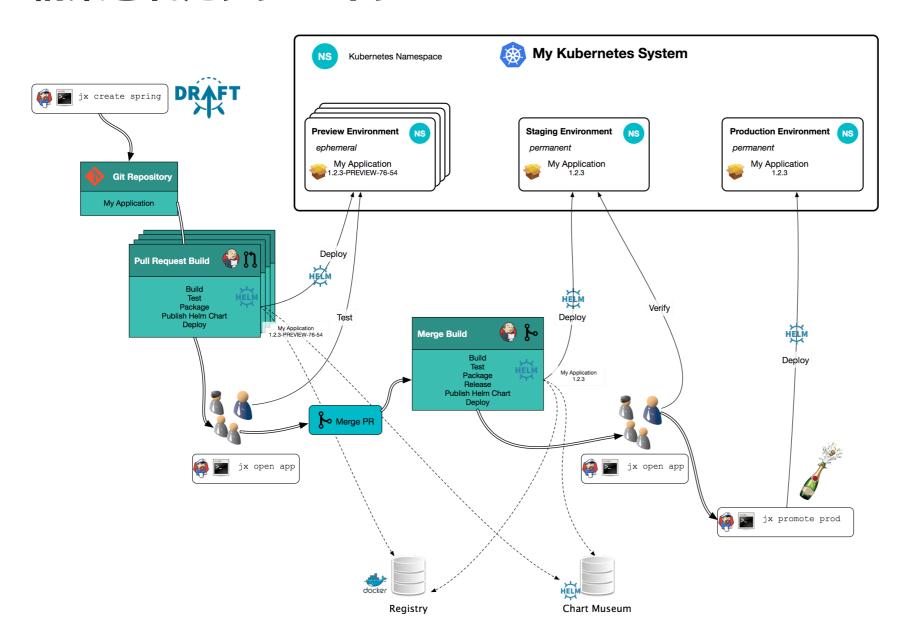
■ Makefile 4 Apache-2.0 Updated 29 seconds ago

environment-dukefield-staging

■ Makefile

Apache-2.0 Updated 43 seconds ago

構築されたデプロイフロー



クイックスタートでプロジェクトを作る

ウィザード形式ですすめていく

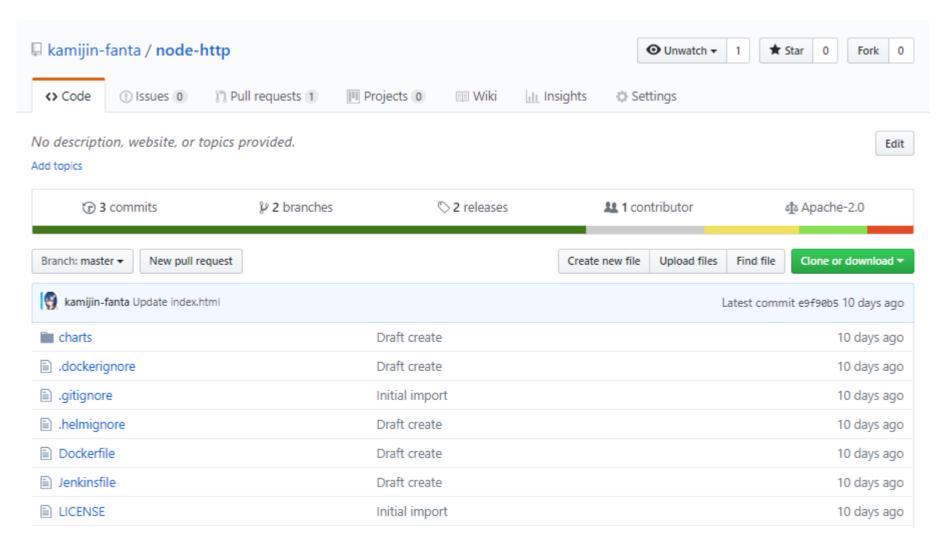
```
root@minikube:~# jx create quickstart -f http
? select the quickstart you wish to create [Use arrows to move, type to filter]
  golang-http
> node-http
  python-http
  rust-http
  scala-akka-http-quickstart
  spring-boot-http-gradle
```

2018年6月現在 プロジェクト名・Githubのリポジトリ名を異なるものにすると、ビルドできなくなるバグが有るので注意

プロジェクト作成完了

```
Created Jenkins Project: http://jenkins.jx.153.127.201.69.nip.io/job/kamijin-fanta/job/n
                              jx get activity -f node-http-jenkins -w
Watch pipeline activity via:
Browse the pipeline log via: jx get build logs kamijin-fanta/node-http-jenkins/master
Open the Jenkins console via jx console
You can list the pipelines via: jx get pipelines
When the pipeline is complete: jx get applications
For more help on available commands see: http://jenkins-x.io/developing/browsing/
Note that your first pipeline may take a few minutes to start while the necessary docker
Creating github webhook for kamijin-fanta/node-http-jenkins for url http://jenkins.jx.15
```

リポジトリが出来る



CIが回る



NAME	HEALTH	BRANCHES	PR	
kamijin-fanta / environment-dukefield-production	•		-	\Rightarrow
kamijin-fanta / environment-dukefield-staging	-	1 passing	-	\Rightarrow
kamijin-fanta / node-http-jenkins	•		-	☆

勝手にデプロイされる

C ① 保護されていません | node-http.jx-staging.153.127.201.69.nip.io



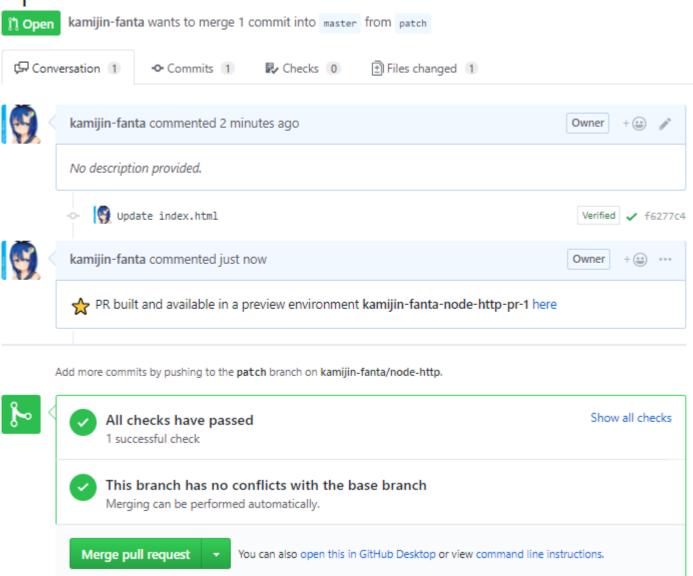
Hello Node from Jenkins X

環境一覧

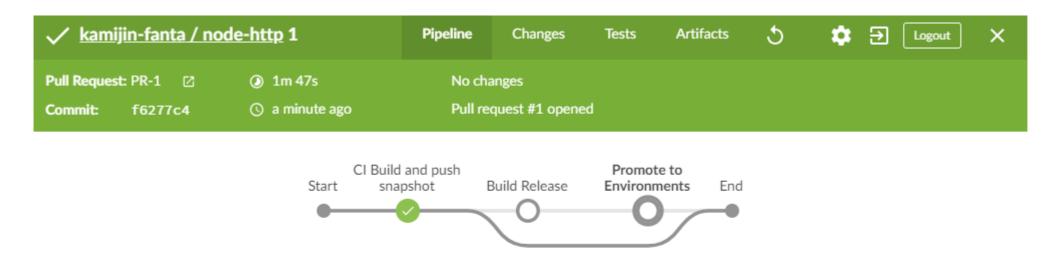
- Develop
 - PRごとに作られる
- Staging
 - masterブランチが自動的にデプロイされる
- Production
 - o promote コマンドで明示的にデプロイを行う

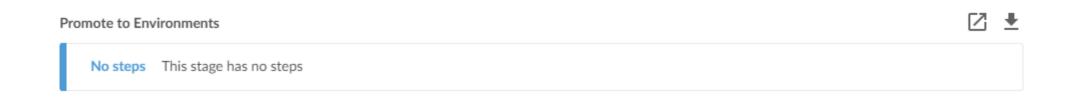
PRを出してみる

Update index.html #1



勝手にCIが回る





勝手に開発環境にデプロイされる

C ① 保護されていません | node-http.jx-kamijin-fanta-node-http-pr-1.153.127.201.69.nip.io



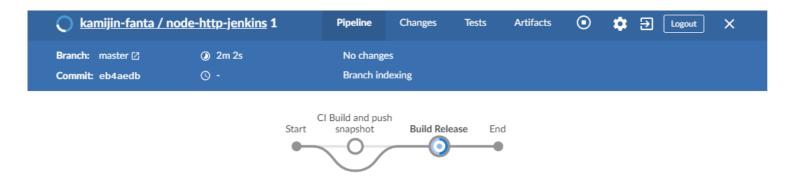
Hello Node from Jenkins X

edit from github hoge

ステージング・本番

- ・マージ
 - o masterがステージングがデプロイされる
- 本番デプロイしたい
 - jx promote APP_NAME --version VERSION --env production

自動的にデプロイが走る





• デプロイ完了

- http://node-http.jx-staging.153.127.201.69.nip.io/
- http://node-http.jx-production.153.127.201.69.nip.io/

jenkins-x

- デプロイの属人性の排除が出来る
- 環境毎にクラスタ分けたりも出来る
- Jenkins on Rails?

ちなみに...

利点だけではない

- カーネルを共有している
 - セキュリティ
 - パフォーマンス
- CPU依存(マルチアーキテクチャはあるが...)
- クラスタの管理・アップグレード

まとめ

- Dockerでデプロイ環境を作ることで、開発から本番まで一貫した環境を用意できる
- Docker周辺技術には様々な選択肢が用意されている
 - プロジェクトの要件・規模に応じて選択を

おわり